

奔流に飲み込まれる経験の中で主の助けを祈る

69:22 の描写は主イエスの十字架を描く文脈で用いられている。まさに、69 編は第一人称単数「わたし」の文体でなされる「救いを求める祈り」である。途中で切りにくいが便宜的 14~22 で区切る。まず、テキストを朗読してみよう。

1. 15~16 節 大水に巻き込まれ翻弄される

15~16 節に描かれた大水に巻き込まれ翻弄されるような人生の様子は、2~3 節の繰り返しである。英語の本を読んでいると overwhelm(閉口させられる、大波に飲み込まれる、転覆する)がぴったりなのであるが(overflow も)、「トンネルに入って出口が見えない」感覚に似て、誰もが経験するものなのかも知れない。「井戸がわたしの上に口を閉ざさないように！」

詩 69:14 は、2 節の「わたしを救ってください、神よ」(hōwōšī'ēnī 'ēlōhīm) という切実な願いと重なっている。忙しすぎや過剰な要求で人は困惑する。しかし、わたしたちには「あなた」と呼びかけ得る「神」がおられる。14 節は、「あなたに向かってわたしは祈ります」で始まる。「私に関する限りは (wa'ānī)、私の祈りは、ヤハウエ、あなたに向かいます」がヘブライ語直訳である。

そして、「御旨にかなうときに」は、「受け入れ可能なときには」('ēt rāsōwn) がヘブライ語直訳。祈り手はすべての祈り・願いが叶えられることはないこと、しかし、御旨にかなう時、受け入れ可能な時に、神が祈りに聴かれることを確信している。

2. 主なる神の「慈しみ」「恵み」「憐れみ深さ」(14、17 節)

信仰者は主なる神の「慈しみ」(hasdekā)「恵み」(tōwb, goodness)と「慈しみ」(hasdekā)、「憐れみ深さ」(rahāmekā)に信頼して、神からの助け、救い、助け出し、贖い(19 節)、敵からの「解放」を願う。

3. 敵対者の嘲りの中で 19-22 節

ここでもまた、敵対する者の嘲り、彼らからの恥、屈辱、苦しめること(信仰のゆえの侮り)が登場し、22 節がマタイ 27:34 に引用され、嘲りはマタイ 27:28-31 に描き出されている。「毒の水」についてはエレミヤ 8:14、9:14、23:15 を参照せよ。69 編 10 節がローマ 15:3 に引用されていることは先回述べた。人としての「尊厳」が汚されているのである。バツハの「マタイ受難曲」、正しくはパウル・ゲルハルトの歌詞(新生讚美歌 221)を参照。

4. 詩編の信仰者は無力であり、しかも、人や物の中に同情や慰めを見出すことはできない(21 節)。

「望んでいた同情」(wā'āwawweh lānūd, and I looked for [someone] to take pity)そして、「慰め」(wəlamnahāmīm, nāham 嘆き悲しむこと、Piel 型は同情する、一緒に嘆き、悲しむこと)もなかった。「誰もなかった」(wā'āyin, wəlō māsātī) there was none for comforters but none I found!

最近松見の心に浮かぶ讚美歌「聖歌」438 「わが胸は罪にかき破られて、その苦しみ耐えがたし、愛の言葉もてわれを慰め労わる人あらざるや イエスの他にこの他一人もなし、悩める時の近き友はイエスの他一人もなし。原詩 Is there anyone can help us! Nobody knows = God knows! 誰も知らない=神は知っておられる。